

「争」わない語り、その不可能性

——坂口安吾「夜長姫と耳男」論——

安達原 達 晴

はじめに

大学の授業で、坂口安吾「夜長姫と耳男」(『新潮』一九五二年六月)を長く読んでいる。「桜の森の満開の下」と並び、学生にはたいへん人気の高いテキストである。卒業論文の対象に選ぶ者も少なくない。文章は読みやすく、内容が鮮烈で強い印象を残すらしい。視覚的な喚起力が大きい^①うえに、刺激に満ちたフレーズも心をとらえるようである。学生によつては、いわゆる「セカイ系」的な物語として親近感を覚えるという。

一方、このテキストは安吾の代表作の一つに数えられ、これまでさまざまなアプローチで研究がなされてきた。雑駁なまとめとなるが、大きな傾向をいくつか述べる。まず、「文学のふるさと」「墮落論」、「教祖の文学」などのエッセイと深く結びついたテキストという捉え方である^③。さらに、芸術家安吾の葛藤や自己確立のドラマを物語に見出す論^④。安吾の古代史や〈飛驒〉という場への関心、総じて安吾の歴史観を踏まえた論^⑤、ときにそれらと

交わり、同時代の戦後日本社会に対する安吾の批判精神を読む論^⑥。典拠からテキストの成立を考察した論^⑦、などである^⑧。

先行研究の多くが、何らかの形で作者である坂口安吾に言及する。また、物語内容については、同じく多くが耳男による夜長姫殺害の意味を論じる^⑨。

演習科目の発表や卒業論文で、その質は玉石混淆だが、こうした先行研究との格闘が度々みられる。ときには、学生らしい自由な発想で思いもよらない読み方を提示されて驚く。こちららも簡単には納得できないので互いに議論を重ね、両者にとり予想外の解釈に出会うこともあった。学生との協同作業により、「夜長姫と耳男」に関する授業内容は少しずつ更新されてきたと稿者自身は感じる。

本稿では、授業実践での蓄積も土台とし、このテキストを改めて論じてみたい。その方法について、あらかじめ二つ示す。一つは、坂口安吾という固有名をいっさい使用しない。もう一つは、耳男が夜長姫を殺す行為にどのような意味があるのかを問うので

はなく、耳男が夜長姫を殺す行為を語ることにどのような意味があるのかを主に問おうと試みる。

一 夜長姫から遠く離れて

まず、「夜長姫と耳男」の筋立てをごく簡単に述べる。「ヒダ」の「タクミ」である耳男は、名人である親方の代理として夜長の長者のもとに行き、他の「タクミ」たちと競い合い、長者の娘である夜長姫の持仏を彫ることになる。ヒメの気に入る仏像をつくった者に褒美として与えられる女性、エナコに両耳を削がれるという目に遭いながら耳男は「バケモノ」の像を彫り、結果、それをヒメは大いに気に入る。次いで、耳男はヒメの「笑顔」を刻もうと「ミロク」製作に取り組むが、二度の疫病が村を襲うなか、ヒメの言動に畏怖と恐怖を募らせていく。「ヒメが村の人間をみな殺しにしてしまう」と「信じた」耳男は、最終的にヒメを殺すに至る。

このテクストで、ヒメの最期のことばは絶大な効力をもつようにみえる。

「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬのよ。お前のミロクがダメなものよそのせいだし、お前のバケモノがすばらしいのもそのためなのよ。いつも天井に蛇を吊して、いま私を殺したように立派な仕事をして……」

耳男は「襲いかかるように仕事にはげむため」、大量の水を浴

びて護摩を焚き、足裏を火で焼く。無数の蛇を裂いて生き血を飲み、その死体を天井に吊るす。つくりかけの像に生き物の血をしたらせ、「血を吸え。そして、ヒメの十六の正月にイノチが宿って生きものになれ。人を殺して生き血を吸う鬼となれ」とまさに呪いを込めるのである。それは自身がとれた「ヒメの笑顔」に押され続け、「それを押し返すために必死に戦わなければならなかった」からである。そのようにして刻まれたバケモノ像にヒメは満足し、耳男を賞賛する。

一方、「ミロク」を手がける耳男に、「ヒメの笑顔」を「押し返さねばならぬという不安な戦いはな」かった。彼は笑顔が押すままにそれを「素直に」表現できればよいという、「芸本来の三昧境」にいることを自覚する。「バケモノ」を彫っていたときより、「ミロク」を彫る「今年のオレの方がすべてに於て立ちまざっていると思」うのである。しかし、耳男の仕事ぶりにヒメはまったく興味を示さず、「ミロク」には「お爺さんやお婆さんの頭痛をやわらげる力もないわ」と指摘する。

「バケモノ」と「ミロク」の評価について、夜長姫と耳男では対照的といえる。ヒメの評価をめぐり、耳男は戸惑う。このとき、耳男と共に困惑する読者もいるかもしれない。そして、一種の謎かけめいた評言に対する解を、ヒメによる最期のことばが与えると捉える読者も、また多いかもしれない。ヒメのことばは、「呪う」こと、「殺す」こと、「争う」ことに価値をおく。なるほど、たしかに呪いを込め争いながら（「戦わなければ」）つくりあげた「バケモノ」は「すばらし」く、製作過程に呪いも争いもな

い「ミロク」は「ダメ」なわけである。

ヒメの最期のことばはテクストの末尾に配置され、かつ印象的な内容といえる。読者は彼女のことが物語の結末と理解し、物語中に起きた出来事やヒメの言動に隠れた謎が解決するように感じるのだろう。恰も、ミステリー小説においてばらまかれた伏線が結末のワンフレーズにより鮮やかに回収されるかのように、である。また、耳男の不明をさらすものとしてヒメのことばを捉えることもできる。「タクミ」として新たなステージに進んだとする、耳男の思い込みを正すことばである。これは、「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」という格言が、「タクミ」の仕事という文脈ではつきり語られるからである。

「タクミ」の資質に恵まれた耳男が最終的に夜長姫から仕事の極意を授かる物語。ヒメが末期に語ることばを真理と読めば、「夜長姫と耳男」の物語内容をこのように要約することも可能だろう。末尾の一文で「ヒメを抱いたまま氣を失って倒れ」た耳男が文字通り目覚め、大名人の道を歩む姿をもこの解釈は予感させる。

しかし、耳男に対して、また読者に対して圧倒的な影響力をもつようにみえるこのヒメのことばを敢えて疑う、あるいは無視する解釈の方法はあり得ないだろうか。本稿では、最期のことばに集約されるヒメの価値観に敢えて乗らずに、新たな読みの方向性を模索してみたい。まず、彼女のことばの力とそれが導く読みの拘束力を切り崩せそうな可能性をもつと考えられる点について述べる。

二 二つの物語の相剋

最初に、夜長姫の存在と一旦切り離し、耳男に備わった「タクミ」の資質を確認する。抑々、このテクストの冒頭には、「ヒダ随一の名人とうたわれたタクミ」である耳男の親方のことばがある。親方は夜長の長者に招かれた際に、耳男を代わりに推薦し、かなり具体的な讃辞を述べる。これには耳男自身も「過分の言葉」と驚き、古参の弟子たちは「老病で死期の近づいた」親方が「モウロク」したと言う。この時点では、親方による耳男評の真偽は不明である。

その後、親方曰く耳男が「力のこもった仕事を」すること、「仏像を刻めば、これが小僧の作かと訝かしく思われるほど深いイノチを現す」ことについては、彼が夜長姫の持仏を刻む作業において証明するといえるだろう。耳男が結果的に刻んだバケモノ像はヒメを満足させ、夜長の長者も「彫りの気魄、凡手の作ではない」と讃える。もちろん、これは耳男が「ヒメの笑顔」に押されまいと戦った結果である。しかし、テクストには彼の仕事ぶりがこのような経緯を辿ることをあらかじめ予測させるようなエピソードがみられる。

耳男が「十五の歳」の出来事である。彼は仲間一人に屋根から突き落とされ、手足の骨を折る。親方は、彼が一日たりとも休むことを許さない。彼は怪我の痛みに眠れぬ苦しみよりも、起きて仕事をしたほうが「凄きよい」と気づき、夜中に「ノミをふる」う。「片手片足でほった欄間」は、怪我の回復後に眺めても

手入れ不要であった。耳男はこの体験を「苦しみを超えたものは仕事だけだということ」を、あの時ほどマザマザと思い知らされたことはない」と総括し、エナコに片耳を落とされた痛みは「仕事の励みになっただけだ」と語る。

テキスト冒頭にある親方の耳男に対する評価は当然、この耳男「十五の歳」の出来事も踏まえて語られた可能性がある。「苦しみを超えたものは仕事だけ」という想いを抱え「タクミ」として生きてきた耳男だからこそ、親方をして「力のこもった仕事をしますよ」と言わしめたのだろう。ちなみに、夜長の長者の使いであるアナマロも当初は耳男の腕を嘲うような発言をするが、やがて「長生きすれば、天下のタクミと世にうたわれる名人になる見込みのある奴」と述べている¹⁰。

以上のように考えると、耳男は夜長姫と出会い、「ヒメの笑顔」に魅入られたからこそバケモノ像を完成できたという見方を疑問視できる。仮に耳男と夜長姫のドラマがテキスト通りの展開をみせずとも、耳男はバケモノ像を、あるいはそれに似た傑出した何かを創造し得たかもしれない。ヒメの存在やその「笑顔」は耳男の才能を開花させるきっかけにすぎず、実は代替可能なものである。そのように捉えることは、強引だろうか。

夜長姫が耳男に絶対的な影響力を及ぼすようにみえる点を取えて疑ってみると、別の物語が浮かび上がる。結末のヒメのことではなく、冒頭の親方のことばを基点とするなら、「夜長姫と耳男」の物語内容は次のようになる。「タクミ」の資質に恵まれた耳男が親方の見立て通り己の力を存分に発揮する物語、である。

この場合、耳男が「己の力を存分に発揮する」とは、「バケモノ」や「ミロク」を彫ることを指す。ヒメ自身が「立派な仕事」と呼ぶ、彼女を殺す行為は含まない。これについては、後述する。

耳男が夜長姫から仕事の極意を授かる物語なのか、それとも耳男が自らの才能に見合う力を顕す物語なのか。このテキストを耳男という「タクミ」の在り方をめぐる物語としたとき、それぞれの解釈によりその様相はだいぶ異なるだろう。

両者の捉え方の違いは、物語中で耳男がなした仕事に夜長姫という存在の影響を介在させるか否かの違いといえる（耳男がヒメを殺した行為を「仕事」とみなすか否かの違いも含む）。それは換言すれば、夜長姫の絶対性を認めるのか、あくまで耳男の主体性に立脚した物語として読むのか、といった議論にもつながる。

そして、いうまでもなく、このテキストを一読した読者は、前者を選択する誘惑に駆られるに違いない。

ここで強調したいのは、次の点である。本稿は耳男による夜長姫の殺害という行為自体を問題化するというより、その行為を耳男がどのように語ろうとするのかに焦点を当てる。先行研究で既になされているように、ヒメ殺害の行為自体がもつ意味を探ることは重要である。しかし、このテキストが耳男による一人称である限り、行為自体の意味のみならず、行為を語る耳男の存在にも目を向ける必要があるのではないか。

これまで、「夜長姫と耳男」を耳男というひとりの「タクミ」の物語として読むとき、夜長姫の影響を絶対視せず、意図的に考慮しない視点があることを提案してきた。もし本当にそのような

視点が有効だとするなら、それは他ならぬ耳男がそう読めるように語っているからともいえる。ここからは、このテキストが耳男による語りであることをより意識し、彼が夜長姫を、また彼女と自身の関係をどのように語ろうとしているのか、考えたい。

三 語る耳男

まず、前提条件を確認する。例えば「オレがこう考えたのは、あとで言えばフシギなことだ。」などの表現から明らかなように、耳男による語りは事後的であり、過去回想と捉えることができる^①。耳男はある地点から、出来事を振り返り語る。当然、彼の記憶は意識的あるいは無意識的な編集を蒙り、変形された出来事が物語として紡がれる。つまり、「夜長姫と耳男」は、語り手耳男による有形無形の意図が反映されたテキストといえる。

物語を語る耳男の意図とは、何か。その大きな一つは、〈自分と夜長姫は互いに別個の、かけ離れた存在である〉ということではないだろうか。この意図は特にテキスト後半、ヒメが耳男の製作したバケモノ像を認めた辺りからより顕著となるようにみえる。「人の祝う元日に、ためらう色もなくわが家の一隅に火をかけたこの笑顔は、地獄の火も怖れなければ、血の池も怖れることがなかるう。」「本当に怖ろしいのは、この笑顔だ。この笑顔こそは生きた魔神も怨霊も及びがたい真に怖ろしい唯一の物であるう。」「ヒメがそれを行う時まで、ヒメの心は全ての人に解きがたい謎であろう。」「このように、耳男は彼女の「笑顔」に多く言及しつつ、ヒメが超人的な存在であることを繰り返し述べる。

まず大きな問題は、耳男が語る夜長姫の超人性をどのように捉えるか、という点である。たしかにヒメの言動は猟奇的といえる。例えば、彼女はエナコに耳男の残った耳を削ぐように命じたり、自害したエナコの血に染まった着物を下着に仕立て直し耳男に身につけさせたりする。また、耳男がバケモノ像を彫る過程でとった行為を真似て、夥しい蛇の死骸を高樓の天井に吊るし、村人たちの死を祈願する。しかし、特にこのヒメの言動を見た耳男が「ハッキリ信じた」ように、「村の人間をみな殺しにしてしまふ」ほどの何らかの力が夜長姫に実際に備わっているのか否かは不明である。

「ホーソー」が流行ったとき、ヒメはバケモノ像を邸の門前に飾らせる。村の五分の一が死んでも長者の邸には病人が一人も出ず、像の作者である耳男以上に、ヒメの神がかり的な評判が広がる。この出来事については、村全体の「五分の一」の死者という数字をどう受け取るかという問題と併せ、結果の偶然性を考えるべきだろう。

耳男は、バケモノ像が「ホーソー神」を睨み返すのを毎日楼上から見ているというヒメの言葉に「呆れ」る。また、新たな疫病が村を襲い、ヒメと共に楼に登った耳男は「バケモノのホコラにすがりついて死んでいる人の姿」を見て、次のように思うのである。

あんなバケモノが魔よけの役に立たないのは分りきっているのに、そのホコラにすがりついて死ぬ人があるとは罪な話

だ。いっそ焼き払ってしまえばいいのに、とオレは思った。オレが罪を犯しているような味気ない思いにかられもした。

この時点で耳男は、少なくともバケモノが「ホーソー神」を睨み返すのを見ていたというヒメの言葉を感じていない。ただし、ヒメの言葉に「呆れ」たときも、「ヒメの心はどうてい量りがたいいものであった」と、夜長姫の存在に超常性は認めている。直後に、「怖ろしいヒメだと思った。たしかに人力を超えたヒメかも知れぬと思った」と考えが揺らいですらいる。

もともと耳男は、夜長姫に超人的な能力があるとまでは思っていなかった。一方、ヒメにバケモノ像を気に入られて以降、彼女の「笑顔」を中心にその存在の超常性を明確に意識する。ヒメの猟奇的な言動に触れ続け、彼女への畏怖を募らせた耳男はやがて、「ヒメが村の人間をみな殺しにしよう」と「ハッキリ信じるに至る」。

ヒメの能力までも信用してしまう耳男と同様の過程を、多くの読者は辿ることになると考えられる。繰り返すが、夜長姫が超人的な能力を有するか否かは、テクストからは明確に判断できない。最終的に能力を有すると「信じた」のは、耳男である。それもまさに言葉の通り、「信じた」だけである。もちろん、彼が「信じた」ことを読者もまた信じる必要性は、ないのである。

耳男が「ヒメが村の人間をみな殺しにしよう」と「ハッキリ信じ」るまでの経緯で重要な役割を果たすのは、夜長姫の蛇を天井に吊るす行為である。ヒメは耳男に命じて蛇を大量に捕獲

し、生きたまま裂かせて血を飲み干す。蛇の死体は、高樓の天井に吊るしていく。これは、「バケモノ」の製作中に耳男がとった行いを真似たものである。「ヒメの笑顔」に押されてひるみがない心を鼓舞し、仕事を続けるため耳男は「蛇の怨霊」の力を借りたのである。「ホーソー」が村に蔓延した際、ヒメはバケモノ像を邸の門前に安置させる。このとき彼女は「耳男の造ったバケモノの像は、耳男が無数の蛇を裂き殺して逆吊りにして、生き血を吸いながら呪いをこめて刻んだバケモノだから（以下略）」と述べており、耳男の行為を「呪い」と認識していることが分かる。

高樓から村を見下ろして言った、村人たち「みんな死んで欲しいわ」というヒメの言葉と蛇の死骸を吊るす行為とを結びつけ、耳男は「ヒメが蛇の生き血をのみ、蛇の死体を高樓に吊っているのは、村の人々がみんな死ぬことを祈っていたのだ。」と判断する。彼はヒメの行為について、かつて自分も同じことをしたが「オレが自分することだから怖ろしいとも異様とも思わなかった」と述べ、さらに次のように考える。

ヒメがしていることはオレが仕事小屋でしていたことのマネゴトにすぎないようだが、オレは単純にそう思うわけにはいかなかった。オレがあんなことをしたのは小さな余儀ない必要によつてであったが、ヒメがしていることは人間が思いつくことではなかった。たまたまオレの小屋を見たからそれに似せているだけで、オレの小屋を見ていなければ、他の何かに似せて同じような怖ろしいことをやっている筈なのだ。

そもそも「呪い」の意味を込め「蛇の生き血をのみ、蛇の死体を高樓に吊」す行為は、耳男が編み出した。それを、用途（あるいは対象）を変えてヒメが踏襲する。耳男の思考の出発点には、ヒメを超人的な存在としてまなざす視線がある。だからこそ、行為自体は模倣でも、「ヒメがしていることは人間が思いつくことではなかった」となるのだらう。多くの読者が耳男による一人称に同調すると考えられ、彼の発想を疑うことは難しい。しかし、所与としてある耳男の夜長姫へのまなざしを取って度外視するなら、ある行為を創出した自らよりそれを模倣した他人に怖れを抱く彼の考え方は、必ずしも説得的とはみせない。

耳男による語りは、その心を「とうてい量りがたい」存在としてヒメを捉えるまなざしが常に先立つ。彼自身がそのことにどこまで自覚的かはともかく、自己と懸隔した存在として夜長姫を語るうとする意図に、耳男の言説は貫かれている。

四 「バケモノ」と「ミロク」

ヒメが自己と対照的な、超人性を有する存在であることを語ろうとする耳男の姿勢には同時に、それと深く関わるもう一つの意図が見え隠れする。前述した通り、彼女が己とは別個の、まったく異なる存在であることを印象づけるねらいである。

「バケモノ」をつくり終えた後、ヒメの「笑顔」の秘密にとりつかれた耳男は「ホトケの顔にヒメの笑顔をうつす」考えのもと「ミロク」の製作にかかる。しかし、バケモノを気に入った一方でヒメはこの「ミロク」に対し、「お爺さんやお婆さんの頭痛を

やわらげる力もない」と言い放つ。「ミロク」について耳男は、バケモノを彫ったときのようなヒメの「笑顔」との闘争は製作中になく、代わりに「ヒメの笑顔が押してくるままの力を、オレのノミが素直に表すことができればよいという芸本来の三昧境」にいると語る。

ヒメは最初に「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」という、自身の考えるいわば「タクミ」精神の神髄を耳男に伝授する。ヒメの立場からは、製作の題材となる対象との〈闘争〉を放棄してつくられている「ミロク」が「ダメ」で評価に値しないのは当然といえる。最期のことばが代表するヒメの価値判断に賛同する読者は多そうだが、しかしながら、肝心の耳男がヒメのことばや思想をどのように考えているのか、実際には不明である。彼は彼で、「ミロク」の価値を次のように語る。

「あのバケモノには子供を泣かせる力もないが、ミロクには何かがある筈だ。すくなくともオレという人間のタマシイがそっくり乗りうつっているだろう」

耳男が、ヒメは「ホーソー神」を撃退したと断言するバケモノ像の力についてかなり懐疑的であることは前述した。また、彼は「ミロク」をつくる自分が「素直な心に立っている」として、かつて「バケモノが腑抜けに見え」たほどの「見るも無慚な嘆きはな」いとも述べる。「心に安らぎを得て、素直に芸と戦っている」「今年のオレ」のほうが、バケモノを彫っていた「去年のオレ」

より「すべてに於て立ちまきっている」と思うのである。

つまり、耳男は夜長姫が「タクミ」としての「立派な仕事」に不可欠とする「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」という精神——〈闘争〉の精神——から遠ざかったことにより、「ミロク」を彫る「今年のオレ」が「バケモノ」を彫っていたときより優れた地点に到達していると語っている。こうした耳男による自己評価は、例えば「ヒメの笑顔」が「オレの確信の根元からゆりうごかしてくずす」と、脆弱なものであることを自ずから予感させる。何よりヒメの最新のことばが、オセロゲームの如く耳男の価値判断の妥当性をひっくり返してしまうように読者には感じられるだろう。

しかし、再三述べるように、耳男による語りの根底には夜長姫に超人性を見出し彼女を畏怖する彼の視線がある。耳男のヒメに対するまなざしを除外するなら、創作の姿勢をめぐる耳男と夜長姫のことばに、果たして優劣を下すことができるのだろうか。

耳男の語りが全編を占めるこのテクストでは、対極的な「タクミ」の精神と、その各々に則りつくられた製作物をめぐる対極的な価値判断が語られる。これら両者は、その内容自体において優劣を下すことは困難である。闘争的であればすぐれた創造をなし得るというヒメの考え方を支持する必然性は、実はどこにもない。むしろ、闘争性を捨て去り、「素直」さや「安らぎ」に立脚した「芸本来の三昧境」に達したと語る耳男にこそ真理があるともみなすことも可能なはずである。

それでも読者の多くがヒメの価値観のほうに分があると思うの

であれば、それは他ならぬ語り手の耳男がヒメの超人性と彼女への畏怖を語り続けるからである。しかし、ある人物の唱える価値観が、その人物に怖れを抱くもう一人の人物の価値観より上位にあるという命題には客観的な論拠を見出しにくい。そして、耳男もまた、ヒメの価値観自体をどのように捉えているのかは、明確に表明していないのである。

「タクミ」の精神と仕事をめぐる耳男の価値観と夜長姫のそれとは、等分に拮抗しており、本来、優劣の判定が難しい。それはつまり、このテクストを、耳男が当初ヒメとの闘争に拘泥していた地点を脱し、「タクミ」としての新たな境地を切り拓いていく物語と十分に読み得る可能性を示す。そのように読み得る潜在的な可能性を担保しているのは、やはり語り手である耳男ではないのだろうか。

耳男が自身の腕に対する自信喪失をはっきり語る箇所がある。先ほど引用した、蛇を天井に吊るすヒメの行為を己の同様の行為と引き比べた語りの直後である。

ヒメの生涯に、この先なにを思いつき、なにを行うか、それはとても人間どもの思量しうることではない。とてもオレの手に負えるヒメではないし、オレのノミもとうていヒメをつかむことはできないのだとオレはシミジミ思い知らずにいられたかった。

「なるほど。まさしくヒメの言われる通り、いま造っているミロクなんぞはただのチツポケな人間だな。ヒメはこの青

空と同じぐらい大きいような気がするな」

これを読むと耳男が、「ミロク」には「お爺さんやお婆さんの頭痛をやわらげる力もない」というヒメの評価を受け容れているようにみえる。ヒメによる「ミロク」評の前提には、「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」という精神がある。当然、引用の時点では耳男はこのヒメの格言をまだ聞いてはいない。そのためか、彼はヒメの「ミロク」評を肯定するが、その理由については明らかにヒメの意図とは異なるものを挙げる。

ヒメによれば「ミロク」が「ダメ」なのは、それが「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」という闘争の精神を欠いてつくられたからである。一方で、耳男は「ミロク」が評価に値しないのは、製作の題材であるヒメの存在が「この青空と同じぐらい大きく、自分の「ノミ」が「とうていヒメをつかむことはできない」からだ」と語る。つまり、闘争性がないからではなく、そもそも対象が己の技量を超えているから、というのである。

この点も、耳男の不明がヒメの最期のことはで正されると読むことが可能だろう。しかし、これまで述べたように、耳男より夜長姫の価値判断を真とすべき必然性は実はこのテキストには見当たらない。さらに強調しておきたいのは、「ミロク」の劣る理由を、ヒメのこととは異なる別の位相で、耳男が語っている点である。耳男は自らの腕の未熟を嘆くものの、彼の言い分によれば、「ミロク」に関しては製作者の側の問題というより、あくまで題

材となる対象の側に製作を困難にする要因がある印象を受ける。

五 ヒメの殺害を語る、こと

ここまでの主張を端的にまとめる。語られる耳男は夜長姫を超人的存在とみなし、その能力をも尋常ならざるものと「信じるに至るが、語る耳男は意識的か否か判じ難いところがあるものの、彼女の存在やことばの影響力を脱し、「タクミ」としての自己の物語をあくまで個別的に語ろうとしていると考えられる。このことが最も明らかであるようにみえる、耳男によるヒメを殺す行為について検討していく。

先に引用した通り、ヒメは「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬ」と闘争的な態度の必要性を説く。その態度の有無により「バケモノ」を上位に、「ミロク」を下位に価値づける。さらに、「いつも天井に蛇を吊して、いま私を殺したように立派な仕事をして……」と言い残した点が、非常に重要である。「天井に蛇を吊す」とは、耳男がバケモノ像を製作する際にかけた「呪い」である。ヒメはこの「呪う」行為をたつたまま起きた耳男による自身の殺害に結びつけ、その殺害行為までも闘争性が加わった「立派な仕事」とであると規定する。ヒメの表現を比喩的に捉えたとしても、彼女が自身の殺害を闘争性の有無という、自らが唱える「タクミ」の「仕事」の在り方をめぐる文脈に引きつけて語っているのはたしかだろう。

こうした誘導尋問にも似たヒメの語りかけに対して、気絶する耳男がどのように応答したのかをテキストから明確に読みとるこ

とは難しい。ただし、忘れてはならないのは、耳男の殺害行為を「立派な仕事」と意味づけたのはヒメの価値判断、立場によるものでしかない、という点である。最終的に耳男が夜長姫から「タクミ」の仕事の極意を授かる物語、はヒメの最期のことばがもたらすこの意味づけを以てして完成するといつてよい。一方、耳男は自身のヒメ殺害行為をどのように語るのか、確認してみる。

新たな疫病がやって来たときも、耳男は小屋にこもり「ミロク」の製作に没頭していた。邸内の人々や邸外と没交渉で、疫病の噂も「別天地の出来事で、身にしみる思いに打たれたことはなかった。」そのような彼の心境は、ヒメと楼に登り村を改めて眺めたとき多少変化する。

オレははじめて高樓から村を眺めた。それは裏の山から村を見下す風景の距離をちぢめただけのものだが、バケモノのホコラにすがりついて死んでいる人の姿を見ると、それもわが身にかかわりのないソラゾラしい眺めながらも、人里の哀れさが目にしみもした。

ここで耳男は村全体、また村人たちの存在を意識にのせる。そして、人々の死を願うヒメの言葉を聞き、蛇を高樓に吊るす彼女の意図を察した彼は「このヒメが生きているのは怖ろしいということその時はじめて考えた」のである。

翌日、前日と同じくヒメと楼にいた耳男は、「ヒメが村の人間をみな殺しにしてしまう」と「ハッキリ信じた。」彼は夥しく吊

るされる蛇の死体を斬り落とすか、逃亡するかいずれかだと思う。しかし人の死に興じるヒメの声を聞き、「このヒメを殺さなければ、チャチな人間世界はもたないのだ」と心変わりする。そのまま躊躇わずに「キリ」をヒメの胸にうちこみ、彼女を殺害する。

自身の仕事に没頭していた耳男は、高樓から村を眺めたことで「人里の哀れさ」を意識し、その存在が「村の人間をみな殺しにしてしまう」と「信じ」るヒメを、「チャチな人間世界をもた」せるために殺すのである。耳男の語るヒメ殺害の経緯が彼の真意にどの程度基づくのか、ここでは問わない。あくまで重要なのは、彼がするように語っているという事実である。耳男が語るヒメの殺害行為に、「タクミ」の仕事としての要素はどこにも見当たらないようにみえる。むしろ、仕事への集中から離れ、己以外の「人里」あるいは「人間世界」を意識してなされており、その意味では「タクミ」の仕事とは対極的な行為といえるだろう。また、耳男はヒメを畏怖すると共に、殺害する直前でも「なんて可憐なヒメだろう」と思うほど常に彼女に魅了されているが、彼女の殺害はそうした彼の想いとは無関係であると、少なくとも彼の語りからは考えられる。耳男の説明によれば、ヒメを殺したのは「人間世界」を維持するためであって、彼が彼女にひとことではあらずし難い複雑な感情を抱いたからではない。

ヒメは耳男による自身の殺害を、対象へのより強固な執着——特に対象との闘争的な関係性により形づくられるそれ——に根差した仕事を良しとする自らの「タクミ」の評価軸に照らし、「立

派な仕事」と価値づける。しかし述べたように、耳男が語るヒメの殺害には「タクミ」に関わる要素はいっさいない。殺害という行為自体が闘争性をはらむものであるという反論は考えられるが、耳男のヒメ殺害は彼女の説く「好きなもの」を「殺す」行為には該当しないだろう。同じく前述の通り、耳男が語る殺害の動機は彼がヒメに抱く、読者によつては恋愛感情を彷彿するような心の機微と無関係だからである。

以上、耳男が夜長姫を殺す行為においても、テクスト中で対置された「タクミ」の精神とそれらに基づき製作される二体の像と同様、耳男側とヒメ側とでまったく異なる意味づけがなされている。そして当然、両者の意味づけの真偽を判定するのは本来、困難である。ヒメは最期のことばで、殺害を「タクミ」の文脈に回収しようとする。対して耳男は、「タクミ」の文脈からできる限りそれを切り離して語ろうと試みる。換言すれば、耳男は自らの「タクミ」の物語から最期のことばに集約されるヒメの影響力をなんとか除外しようと密かに目論んでいる可能性がある。彼は、「タクミ」の資質に恵まれた己が最終的に夜長姫から仕事の極意を授かる物語、ではなく、「タクミ」の資質に恵まれた己が親方の見立て通りの力を存分に発揮する物語、を実は語りたいのではないだろうか。

おわりに

これまで、語るという行為そのもののうちに、「タクミ」としての自律性を担保しようと試みる耳男の企図を探ってきた。こ

に、ひとつの疑問が生まれる。もし耳男が夜長姫の存在やことばに抗い、「タクミ」としての自己の物語を自律的に語ろうとするのであれば、より効果的な方法が他にあったのではないか、という問題である。例えば、ヒメの最期のことばをテクストの冒頭に配し、そこから彼女の思想を否定していくような展開を語ること、耳男にはできたはずである。そのような語り方を耳男が選択しなかったのは、なぜなのか。本稿の最後に、この問いに対する稿者なりの解を二つほど述べておく。

一つは既に再三述べたように、語り手である耳男が自身の語る意図に少なからず無自覚であった可能性である。二つ目は、いうまでもなく、特に自らの「タクミ」の物語においてヒメへのあからさまな抵抗を語ることは「争う」ことに他ならないからではないだろうか。耳男は、「好きなものは呪うか殺すか争うか」と説くヒメの術中に陥ることなく、己の物語を語る必要があったと考えられる。

ヒメとの初対面で耳男は親方の教えに従い、彼女を見つめる。その際の心境を、「のしかかるように見つめ伏せてはダメだ。その人やその物とともに、ひと色の水のようにすきとおらなければならぬのだ。」と語る。これは視線の話題であると同時に、「タクミ」の方法論あるいは気構えに関わる話題でもあるだろう。対象との距離感や対峙の在り方とも結びつく。耳男のこのことばを借りれば、「のしかかるように」語り伏せるのではなく、「その人やその物とともに、ひと色の水のようにすきとおる」が如く語ることこそ、彼が目指した戦略だったといえる。

「のしかか」らずに「ひと色の水のようにすきとお」とは、耳男が「ミロク」を彫る最中に到達し得たと考えた「芸本来の三昧境」、「素直」さの境地と通じるようにみえる。耳男は、わが身に起こった出来事を「バケモノ」的にではなく、「ミロク」的になんとか物語ろうとしたのかもしれない。

しかしながら、これもまたいうまでもないが、どのような方法であれ、耳男が〈語る〉行為を継続しつつ、結果的にヒメと争う事態を回避するのは不可能である。そもそもヒメを語ってしまう時点で所詮、彼には勝ち目がないのである。したがって、回想のなかの耳男が「氣を失って倒れてしま」うのと並行し、回想する耳男もまた語ることを中断してしまうのは、彼にとって唯一残った退路を選んだのだっただろうか。耳男による語りの途絶が、挫折なのだとしたら、彼が挑んだ企みの不可能性が明白になったといえる。ちなみに、この挫折が耳男にとって無念であったのか、それとも幾ばくかの甘美を伴うものであったのかという問いもまた、テキストが読者に委ねる振幅から引き出すことができるのだろう。

注

- (1) 安吾のテキストはアニメも含め、たびたび映像化されている。
(2) 奥野健男『坂口安吾』（文芸春秋、一九七二年九月）など。
(3) 中石孝「夜長姫と耳男」（『国文学解釈と鑑賞』一九七三年七月）、井口時男「桜の森の満開の下」と「夜長姫と耳男」

（ユリイカ）二〇〇八年九月）、加藤達彦「視線の対決―坂口安吾「夜長姫と耳男」論」（『文芸研究』二〇〇一年九月）、岩波隆浩「坂口安吾晩年の歴史観と現代への問題意識―「夜長姫と耳男」を手がかりとして」（『国文学試論』二〇一六年三月）など。

- (4) 石川正人「夜長姫と耳男」論（『成蹊国文』二〇〇〇年三月）、美濃部重克「幻の国飛騨「夜長姫と耳男」」（『国文学解釈と教材の研究』二〇〇五年二月）など。他、このテキストに芸術家小説としての側面を認める論は、角田旅人「夜長姫と耳男」曼荼羅（久保田芳太郎・矢島道弘編『坂口安吾研究講座Ⅱ』一九八五年十一月、三弥井書店）、木村和夫「夜長姫と耳男」の一考察―「死」の契機を視点として―（『新潟県郷土作家叢書Ⅰ 坂口安吾』一九七六年四月、野島出版）などがある。

- (5) 浅子逸男「夜長姫と耳男」―古代のまぼろし―（『国文学解釈と鑑賞』一九九三年二月）、原卓史「安吾と飛騨―「夜長姫と耳男」への道程」（『坂口安吾研究』二〇一四年二月）など。

- (6) 前掲注（3）加藤論文、鬼頭七美「生き神信仰を越えて―「夜長姫と耳男」論」（『昭和文学研究』二〇〇二年三月）、前掲注（3）岩波論文など。

- (7) 早川芳枝「夜長姫と耳男」論―発想の源泉としての長者伝説と『飛騨匠物語』（『日本文学文化』二〇一四年二月）など。

(8)

他に物語を精神分析の文脈で解釈した長田光展「坂口安吾『夜長姫と耳男』―姫と耳男の深層構造―」(『人文研紀要』一九八五年八月)、耳男の〈個〉としての自立のドラマを批評的な手法により辿った本文映子「オレ」が「オレ」であるために―坂口安吾『夜長姫と耳男』論(前編)―(『論樹』一九九九年三月)・同後編(『論樹』一九九九年十二月)、「紫大納言」と「桜の森の満開の下」など他の安吾作品との比較を用いた鬼頭七美「坂口安吾における死と芸術―作品の結末にこめられた意味―」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』一九九七年三月)、柴田まち子「坂口安吾『紫大納言』『桜の森の満開の下』『夜長姫と耳男』をめぐって」(『国文』二〇〇一年一月)、近藤ようこの漫画版との比較を行った時野谷ゆり「漫画に描かれた夜長姫と耳男―近藤ようこ『夜長姫と耳男』をめぐって」(『坂口安吾研究』二〇一四年十二月)などがある。

(9)

ごく一例を挙げると、前掲注(3)井口論文は「耳男による夜長姫殺しは残酷にして誘惑的な自然、すなわち起源たる「ふるさと」殺しなのであって、それはおのずから、母殺しとしての意味を帯びてしまうのである。」、前掲注(6)鬼頭論文は「『夜長姫と耳男』は、(中略)最後の耳男の夜長姫刺殺に、カリスマ的存在への狂信や集団発狂に対する危機感と、人間の個としての主体性を確保するという「人間の真実の生活」とを、表現した小説なのである。」、前掲注(5)原論文は「耳男がヒメを刺殺することとは、「戦いの歴史」に

終止符をうつ行動である。常に権力に長じたものが勝ち続けるとは限らない。」と、それぞれ述べている。

(10) むろん、このアナマロのことは、あくまでも耳男の身を案じ、彼を逃がすための方便ともとれる。

(11) このテキストが一人称の過去形であることに言及した論として、前掲注(8)本文論文(前編)がある。また、同じく前掲注(8)鬼頭論文「坂口安吾における死と芸術―作品の結末にこめられた意味―」も、特に「紫大納言」「桜の森の満開の下」との比較で「夜長姫と耳男」における一人称語りの意味を考察する。

(12) 前掲注(6)鬼頭論文でも、長者の邸に病人が出なかったことと「バケモノ」像や夜長姫の存在との「因果関係はおそらく偶然であ」と述べる。

(13) そのような点では本稿もまた、複数の先行論が言及する耳男の〈主体〉をめぐる物語と位置づけられるのかもしれない。ただし、その〈主体〉の在処は物語内容(語られる過去)にあるというより、あくまで物語行為(語る現在)の地平において見出されるべきと考える。

※「夜長姫と耳男」の本文は『坂口安吾全集12』(筑摩書房、一九九九年一月)に拠った。引用文中の傍点はすべて稿者による。

※これまで授業やゼミナールで意見を交わした、すべての学生の皆さんに感謝いたします。特に東史奈さん、和田春菜さんにはお礼を申し上げる次第です。また、伊藤一郎先生(東海大学名誉教

授)がご指導になった前場美里さんの「夜長姫と耳男」論が、『東海大学 日本語・日本文学 研究と注釈』第8号(二〇二二年五月刊行予定)に掲載予定です。こちらも併せてお読みいただければ幸いです。本稿を東海大学文学部日本文学科の研究・教育活動にご尽力くださった、故・鈴木泰恵先生に捧げます。

(あだちばら・たつはる 本学特任講師)